

葉蘭をめぐる冒険

—George Orwell, *Keep the Aspidistra Flying*
についての一考察—

川 端 康 雄

はじめに

Keep the Aspidistra Flying (1936) は *Burmese Days* (1934)、*Clergyman's Daughter* (1935) に次ぐ George Orwell の三作目の長編小説にあたる。初版 3000 部(定価 7 シリング 6 ペンス)のうち、2500 部が製本され、2256 部が売れたというから、この時期としてはまずまずの売れ行きだったといえる (Fenwick 43)。しかしオーウェルの著作全体のなかでそれほど評価の高い作品とは言えない。刊行直後の書評 (*New Statesman and Nation* 25 April 1936) で Cyril Connolly は “[T]he obsession with money about which the book is written, is one which must prevent it from achieving the proportion of a work of art” と述べている (Meyers 67)。また Dorothy Van Ghent は、米国版刊行直後の書評 (*Yale Review* Spring 1956) で、“The action of the novel is humorously pathetic, the characterizations winsome” としながらも、“[O]ne feels that Orwell was not—here, at least—in complete command of his feelings and judgments” と結んでいる (Meyers 83)。いずれも作家としての技量が十分に発揮されていない作品だとする評価である。

オーウェル自身、この小説について、*Clergyman's Daughter* と併せて、否定的に言及している。1944 年、Leonard Moore (オーウェルの literary agent) が Penguin Books からこの小説を復刊する企画を進めようとした

ところ、オーウェルはこう書いた。

I had not realised you were in negotiation for a Penguin of “Keep the Aspidistra Flying.” I don’t think I can allow this book to be reprinted, or “A Clergyman’s Daughter” either. They are both thoroughly bad books and I would much rather see them go out of print It wouldn’t do me any good to have those two books revived.

(16: 232)¹

さらに、その翌年 1945 年 3 月には、Secker & Warburg 社で企画中のオーウェル選集にこの二作品を加える案に対して、再版を望まぬ旨の返答をしている。そこでは “These are silly potboilers which I ought not to have published in the first place” とまで述べているのである (17: 113)。

これはかなり厳しい自己評価であるが、凡庸な自著を傑作だと自惚れる作家の言説と同様に、当然ながらこれも文字どおりに受け取る必要はない。じっさい、エッセイ “Why I Write” (1946) のなかで、構想中の *Nineteen Eighty-Four* (1949) に言及して、“It is bound to be a failure, every book is a failure” (18: 320) と述べているように、オーウェルが自作品に課した基準は相当に高いものだった。さらに、*Keep the Aspidistra Flying* に関して言えば、初版のテキストが著者には不本意な形で改変されたものであったという事情がある。すでにゲラ刷りになっていた段階で、版元の Victor Gollancz が、名誉毀損を恐れて、実在する(あるいは実在のものを示唆する)商品名や広告のコピー、地名などの大幅な変更を求め、著者はそれに従わざるをえなかった。出版社によるこの自己検閲が、著者のこの小説に対する自己評価を一層低めたということは十分に考えられる。変更前のテキストの状態に極力戻すという方針を取ったテキストは、初版刊行から半世紀をへた 1987 年に Peter Davison 編の全集版によってようやく陽の目を見た。現行のペンギン版もこの全集版を踏襲しているので、いまでは上記の自己検閲以前のテキストが一般読者に提供されている。その異同については全集版巻末の “Textual Note” にリストが出ており、ゴランツがいか

にクレームを恐れていたかが具体的に示されていて興味深い(4: 279 ff.)。

ともあれ、オーウェル自身の厳しい評価があったにせよ、この小説には、1930年代半ばのイギリス社会がかかえていた問題が独特な語りによって浮かび上がっている。筆者が目下課題のひとつに据えている大戦間のイギリスの文化研究を進める上で、この小説は格好の素材であるように思われる。本稿はこの小説テキストを文化研究の観点から読解する試みである。その際にもっとも重要な鍵語となるのは、当然ながら、葉蘭 (aspidistra) である。

I. 「冗談」としての葉蘭

タイトルに使われているのみならず、本文中でもこの葉蘭は頻繁に言及されており、この鉢植えの観葉植物は作品全体のまさに「ライト・モチーフ」(小池 408) になっている。

主人公の Gordon Comstock は「怒れる若者」の1930年代版のような人物として提示される。彼の家柄はイギリスの社会階層のなかでも、「最も陰鬱な階層、中産階級の中、土地を所有しないジェントリー (the most dismal of all classes, the middle-middle class, the landless gentry)」(39) に属する。祖父の代、つまりヴィクトリア朝に一気に繁栄の波に乗ったものの、その波よりも速く凋落し、1905年生まれの子孫が知る一家は「奇妙なまでに退屈で、みすばらしく、生氣のない、無能な一族 (a peculiarly dull, shabby, dead-alive, ineffectual family)」(40) であった。12人兄弟だった祖父は11人の子供をもうけたが、その11人は全員あわせて2人しか子供をもうけていない。それがゴードンとその姉 Julia ということになる。父親は公認会計士として開業したものの、本来自分が望んだ職業でなく親から半ば強制されたものだったということもあり、順調にはいかず、年収が500ポンドから200ポンドに落ち込み、1922年、ゴードンが17歳の年に病死している。この一家は没落しながらも中産階級の体面だけは重んじたために、他を犠牲にして長男のゴードンの「教育」のために多額の金をか

け、プレパトリー・スクールから「三流」のバブリック・スクールに彼を送る。しかし経済的な実態と裏腹に体裁ばかりとりつくろう一家の体質をゴードンは学校生活を通して常に意識させられ、16歳のとき、彼はすでに「金の神とその豚のごとき僧侶たちすべて (the money-god and all his swinish priesthood)」に敵対する立場にいる。彼は「金に宣戦布告している (He had declared war on money)」(48) のだった。物語の冒頭(時は1934年11月末)でゴードンはロンドン北部の貸本屋の帳場にいる。少し前に、「金の神」に本格的に対決すべく、広告会社のコピーライターという比較的収入のよい仕事を投げ捨てて、書店(古書販売と貸本業を兼ねる)で薄給のアルバイトをしながら、詩人として創作にむかっているのだった。住まいはロンドン北西部の Willowbed Road なるぱっとしない通りにある安下宿。歩いて五分のところに悲惨なスラム街があるが、それに比べればここはまともだという。

Willowbed Road itself contrived to keep up a kind of mingy, lower-middle-class decency. . . . In quite two-thirds of them, amid the lace curtains of the parlour window, there was a green card with “Apartments” on it in silver lettering, above the peeping foliage of an aspidistra. (23)

これは第2章の冒頭部分のくだりであるが、本文中で頻出する“aspidistra”の最初の使用例がここに見える。² Mrs Wisbeach が経営するこの「独身紳士」専門の下宿で、ゴードンは屋根裏の寝室兼居間を一食付きで週27シリング6ペンスで借りている。この部屋のなかにも葉蘭の鉢が置かれている。ゴードンはこの葉蘭に対して内心敵意を抱いている。

As Gordon threw away the match his eye fell upon the aspidistra in its grass-green pot. It was a peculiarly mangy specimen. It had only seven leaves and never seemed to put forth any new ones. Gordon had a sort of secret feud with the aspidistra. Many a time he had furtively attempted to kill it — starving it of water, grinding hot cigarette-ends

against its stem, even mixing salt with its earth. But the beastly things are practically immortal. In almost any circumstances they can preserve a wilting, diseased existence. Gordon stood up and deliberately wiped his kerosiny fingers on the aspidistra leaves. (29)

ゴードンがこれほどまでに敵意を抱く葉蘭とはいかなる意味合いを有するものであろうか。その象徴的な含意を同定しなければならないが、そのためにまず葉蘭という植物そのものの特徴を押さえておく必要がある。

葉蘭はユリ科ハラン属の常緑多年草で原産地は中国中南部、日本には古い時代に渡来したとされる(ただし鹿児島県の黒島にも自生があるという)。「根茎が地中を横にはって伸び、その節から葉柄を直立して葉をつける。葉柄は長く 10~20 cm, 葉身は長さ 30~50 cm の長楕円状披針形で、幅 8~15 cm, 深緑色で光沢があり、先がとがる」(平凡社版『世界大百科事典』「ハラン(葉蘭)」の項より)。日陰でよく育ち、一年中葉が青々としているので、庭園に植えられる。日本では葉は生花の材料とするし、また料理を盛るのにも用いられてきた(現在ではビニール製の代用品が多いわけだが)。日本や中国では根茎は利尿、強心、去痰、強壮薬として利用される。

この植物がイギリスにもたらされたのはそれほど古くはなかったようである。*OED* に当たってみると、葉蘭の英語名にあたる *aspidistra* の初出は 1822 年となっている。ちなみにこの語は本来近代ラテン語で、「盾」を意味するギリシャ語 *aspis* とユリ科の植物の属名 *istra* の合成語だとされる。「盾」はこの植物の葉の形状に由来するわけであろう。さて、*OED* のこの語の定義はこうなっている。

A plant of the genus so called, belonging to the family Liliaceae and native to China and Japan; frequently grown as a pot-plant, and often regarded as a symbol of dull middle-class respectability.

最後の部分の「[葉蘭は]しばしば退屈な中産階級のリスペクタビリティ[体面、お上品さ]の象徴とみなされる」という説明は示唆的である。本稿が問

題にするオーウェルの小説そのものがおそらくそのイメージ形成に(オーウェルがそれを創出したというのではなかったにせよ)関与したものと思われ、じっさい、*OED* が掲げる用例にはこの小説のタイトルが含まれている。

1820年代初頭、John Damper Parks なる人物がロンドン・中国間の航海をおこなった。帰国した際に、薔薇、菊、椿などとあわせて持ち帰ったのがイギリスに入った最初の葉蘭だったという。換気の悪い日陰の場所といった悪条件に耐えられる葉蘭はすぐに都市の中産階級の家で観葉植物として一般化した。とにかく寒さにも乾燥にも、煙や埃、あるいは悪い土壌にも驚くほど耐久性を有するために、“cannon-ball plant” とか “cast-iron plant” という綽名まで付いた。ヴィクトリア朝の中産階級のリビング・ルームの最も暗い場所にはたいてい葉蘭の鉢が置かれているのが見られる、というほどにまでポピュラーなものになったのである(Loewer)。

それから時代が下って、第一次大戦後の1920年代において、葉蘭はすでにお決まりの冗談の種になっていることが確認できる。これについては、中島文雄の『英語の常識』(1957年)にこんな紹介がなされている。

はらん (aspidistra) と呼ばれる特異な植物、その起源と繁殖方法はわれわれの窺い知りえざるところであるが、これは郊外の住宅で盛んに育ち、甚だ頑健で駱駝の如く長い間水無しでやって行ける。例えば一家が休暇で不在の時など、それは死ぬだけの精神をも持たないのである。しかしひとつの英国的笑種としての地位を見出した。(40)

このくだりの種本になっているのは M. V. Hughes の英国文化を主題にした1927年刊行の書物 *About England* である。中島が依拠した原文は以下のとおり。

A peculiar plant, called an aspidistra, whose origin and means of propagation are hidden from us, thrives in suburban villas, and is so hardy that it can go, like a camel, for long periods without water, as

for instance when the family is on holiday. It has not the spirit even to die. But it has found a status as a national jest. (Hughes 355)

両者を比べると中島が自著でヒューズの説明をそのまま引き写していることがわかるが、私の指摘したいのはべつに昔の英文学者のおおらかな執筆の流儀のことではない。1920年代においてすでに葉蘭が「国民的な冗談 (national jest)」として定着しているという証言がここに記されているわけであり、オーウェルが1930年代半ばに自分の小説の鍵となるシンボルとしてこの「冗談」の種を用い、タイトルにまで含めていること——この事実に注意を促したいのである。ついでながら、ヒューズの上掲の本のなかでは、「外国人には分りにくい英国の standing joke」(中島 39)として、さらに地名としての Wigan も冗談の一つに加えられている (Hughes 352)。いうまでもなく、Wigan とはオーウェルが *Keep the Aspidistra Flying* を書き上げた後、ルポルタージュ執筆の調査のために1936年に訪れた炭坑町であり、そのルポルタージュのタイトルは *The Road to Wigan Pier* (1937) というのだった。オーウェル自身が説明しているように、“Wigan Pier” というフレーズそのものが当時のミュージック・ホールの standing joke だったのである。³ このように、オーウェルの複数の著作のタイトルに「冗談」が含まれているという事実は、記憶に留めておくに値する情報であるように私には思われる。

II. 貸本屋の人々

Keep the Aspidistra Flying の第一章はゴードンが店員を勤めるロンドン北部の書店が舞台で、ショウウィンドウから眺められる戸外の情景(特に商品広告のポスター)と、そこに出入りする何人かの客がゴードンの視点から描かれる。貸本コーナー(「保証金なしの二ペンス」で一冊借りられる)は800冊ほどの小説が部屋の三方を天井まで埋め尽くしている。本はアルファベット順に並んでいる。そこで語り手が列挙する作家名は“Arlen, Burroughs, Deeping, Dell, Frankau, Galsworthy, Gibbs, Priestley, Sapper, Walpole”

(3) となっている。⁴ いずれも当時よく読まれた作品ながら、微妙に異種混濁的なこのリストそのものが(少なくともこれらの名前になじんでいる同時代の読者の)笑いを取るような仕掛けになっているといえるが、それは同時にこの直後に繰り上げられる異なる階層の客とゴードンとの珍妙なやりとりの導入にもなっている。

その貸本コーナーに常連客の二人の女性が同時に入ってくる。“middle-middle class”に属する Mrs Penn と、“lower-class woman”の Mrs Weaver の二人である。両者の読書趣味は対照的で、“lowbrow”であるウィーヴァー夫人はデルの小説 *The Silver Wedding* を返却し、娘が勧めるディーピングか娘の亭主が好むバロウズかと迷ったあげく、またデルの *The Way of an Eagle* を借りてゆく。他方、ペン夫人は *The Forsyte Saga* を自分が“highbrow”であることを顕示するために表紙が見えるように抱えつつ返却にきて、ウォルポールの *Rogue Herries* を借りてゆく。その本選びのときにペン夫人はゴードンを相手に、ゴールズワージー、プリーストリー、ウォルポールといった、「ハイブラウ」向きだと信じる作家を絶賛し、ウィーヴァー夫人がデルの名前を出したときにゴードンに目配せして軽蔑の念をしめす。

Behind Mrs Weaver's back she smiled up to Gordon, archly, as highbrow to highbrow. Dell! The lowness of it! The books these lower classes read! Understandingly, he smiled back. They passed into the library, highbrow to highbrow smiling. (9)

このくだりでは「中産階級の中」であるペン夫人も、「より下の階級」のウィーヴァー夫人と同様に戯画化されている。前者も、作家談義の空疎な言辞によって「ハイブラウ」を気どるスノビズムが愚かしいものとして描かれているのである。とはいえ、ここでゴードンの視点から描かれた下層階級の読書趣味への皮肉は、ひととき辛辣である。

デル、バロウズ、ディーピング——これらの作家名は70年をへた現在ではほとんど忘却の淵に沈んだといえるが、いずれも当時の流行作家だっ

た。ここで関連してくるのが Q. D. Leavis の *Fiction and the Reading Public* (1932) での議論である。“In twentieth-century England not only every one can read, but it is safe to add that every one does read” (3) という印象的な書き出しで始まるリーヴィスのこの出世作は、19 世紀後半以来の初等教育の普及に伴ってイギリス国民の識字率が飛躍的に伸びた結果としての、読書の大衆化の問題を社会学的なアプローチを援用して考察したものであった。彼女にとって、読者層の増大は必ずしも歓迎すべき事態ではない。むしろ新聞ジャーナリズム、ラジオや映画などの新興メディアの悪影響をこうむって、読書趣味は低俗化した。当代のベストセラー小説は大衆の悪趣味に迎合し、またそれを助長している。そこで駆使されるイデオロムは粗雑で幼稚なものになっているばかりでない。ジャーナリズムの受け売りにすぎない紋切り型の思考を示すフレーズやクリシェをまき散らして有害である。これは現代文明の衰退を示すものにほかならない——大まかにいえばそのような論調で警鐘を鳴らしているわけであるが、そこで具体的に検証されるのが上記のバロウズやディーピングといったベストセラー作家の小説群なのである。貸本屋、鉄道駅のキオスクなどで消費されるこれらの「低俗」な読み物の悪影響に抗って、「マイノリティ」（すなわち知的エリート）は何らかの手だてを講じる必要があると説くが、リーヴィスの抱く今後の見込みはペシミスティックなものである。

Keep the Aspidistra Flying における大衆小説の言及とそれを享受する人々の戯画化は上記の Q. D. リーヴィスの論調と重なる部分がある。少なくとも「金の神」の掟に抗いつづける期間の（それがこのテキストの大半を占めるわけだが）ゴードン・コムストックは、現代社会の墮落を示すそうした文化商品を拒否し、「マイノリティ」に属する一人の知識人として、高踏的な詩の創作をめざすのである。物語の後半、飲酒事件を起こしたことが書店主の McKechnie 氏の知るところとなって、ゴードンはこの書店を解雇されてしまうが、上流階級の友人 Ravelston の斡旋でロンドン南部の貧民街で再び貸本屋の店員の職につく。その“twopenny library”を一

目見て、ゴードンはそこが前の貸本屋よりもさらに低級なものだと知る。

McKechnie's library had been comparatively highbrow. It had dredged no deeper than Dell, and it even had books by Lawrence and Huxley. But this was one of those cheap arid evil little libraries ("mushroom libraries," they are called) which are springing up all over London and are deliberately aimed at the uneducated. In libraries like these there is not a single book that is ever mentioned in the reviews or that any civilized person has ever heard of. The books are published by special low-class firms and turned out by wretched hacks at the rate of four a year, as mechanically as sausages and with much less skill. . . . Mr Cheeseman . . . spoke of "ordering the books" as one might speak of ordering a ton of coals. He was going to start with five hundred assorted titles, he said. The shelves were already marked off into sections — "Sex," "Crime," "Wild West," and so forth. (225)

ここには支配体制の永続化に資する「愚民化」の装置としての大衆文化というモチーフが語られている。これは *Nineteen Eighty-Four* で描かれた文化戦略としての「大衆文化」の散布というテーマを予告しているといえるかもしれない。Oceania 国の支配体制においては、歴史性を帯びた文化的産物を所持することが重罪となる反面、プロール階級に向けて「スポーツ、犯罪、星占い以外にはほとんど何も載っていないくだらぬ新聞、扇情的な 5 セント小説、セックスばかりの映画、そして作詞機という名で知られる特殊な万華鏡のごとき機械によってまったく自動的に作られるセンチメンタルな歌謡曲 (rubbishy newspapers containing almost nothing except sport, crime and astrology, sensational five-cent novelettes, films oozing with sex, and sentimental songs which were composed entirely by mechanical means on a special kind of kaleidoscope known as a versificator)」(9: 46) が製造されている。⁵ 上の引用で語られているような 1930 年代に増殖しつつあった "twopenny library" も、ゴードンの目から見れば、「金の神」の支配の土台をいっそう堅固にせんとはかる、文化戦

略の一装置として機能している。

語りのこの時点で、同時代の文化全般についてのゴードン・コムストックの評価と将来的展望は陰鬱なものである。頻出する爆弾のイメージに示されるように、カタストロフィを望むねじれた強迫観念にとりつかれている。しかしながら、そうした過剰なペシミズムを脱却する主人公の成長のありさまというのがこの小説の主眼なのであって、それが葉蘭に対する彼の態度の変化によって象徴的に示されることになる。そこでこの植物に再び話を戻さなければならない。

III. 葉蘭とディーセンシー

第1節で確認したように、すでに1920年代には葉蘭は“national jest”の定番のひとつとなっていた。それが *Keep the Aspidistra Flying* では、ロウアー・ミドルすなわち下層中産階級の持ち物として戯画化されている。前節で引いたゴードンの安下宿のある Willowbed Road の描写では、この通りが「一種のけちくさい下層中産階級のディーセンシー (a kind of mingy, lower-middle-class decency)」(23) を有していて、この界隈の多くの家で窓辺に葉蘭の鉢が見られる。ゴードンの下宿の部屋にある鉢はすでに見た。下宿の二階の食堂にはさらに多くの鉢があってゴードンが正確に数えられないほどだ。サイドボードの上、床、補助テーブル、さらに窓辺の台にも葉蘭の鉢が置かれ、光をさえぎっている。薄暗がりのなかで回り中が葉蘭だらけで、「どこか日の射さない水槽のなかで、水草のわびしい葉に囲まれているような気分 (you had the feeling of being in some sunless aquarium amid the dreary foliage of water-flowers)」(30) になる。自室に戻って、この詩人は書き出したばかりの野心作 *London Pleasures* を苦吟するが遅々として進まない。深夜になり、通りを過ぎる車のヘッドライトが「アガメムノンの剣 (Agamemnon's sword)」のような葉蘭のシルエットをつくる (38)。

こうした葉蘭の描写としばしば対になって出てくるのが“decency” (お

よびその形容詞形の“decent”)という語である。周知のようにこの語はオーウェルの著作全般にわたるキーワードともいえるものであり、とりわけ一連のエッセイに見られるように、通常はポジティブな感情価値を付与して用いられる。その場合は、「人間らしさ」「品位」「まっとうさ」といった訳語を当てることができる。ところが、「金の神の掟」に反逆している間のゴードンにとっては、この語は“respectability”と重なり合う意味内容を有し、いわば葉蘭を愛好する「お上品」で俗悪な中産階級のメンタリティを示すものとしてアイロニカルにとらえられているのである。第10章冒頭のくんだり、飲酒酩酊で事件をおこしてマッケクニーの書店をクビになったあと、ゴードンはロンドン南部 Lambeth の貧民街の屋根裏部屋に転居している。

Before, he had fought against the money-code, and yet he had clung to his wretched remnant of decency. But now it was precisely from decency that he wanted to escape. He wanted to go down, deep down, into some world where decency no longer mattered . . . (227)

このように、「反逆者」としてのゴードンは自分自身を「下へ、下へ」と追いつめてゆくのだが、その際にディーセンシーなるものは邪魔となる。この貧しい部屋にさえ葉蘭の鉢が備え付けられている。ある夜、暖房のない寒い部屋でぼろの布団にくるまって寝ている場面で、その葉蘭がすでに一週間前に枯れてしまっていたという記述がある。

The aspidistra had died a week ago and was withering upright in its pot. . . . So here he lay, Gordon Comstock, in a slum attic on a ragged bed, with his feet sticking out of his socks, with one and fourpence in the world, with three decades behind him and nothing, nothing accomplished! Surely *now* he was past redemption? Surely, try as they would, they couldn't prise him out of a hole like this? He had wanted to reach the mud — well, this was the mud, wasn't it? (245)

これがゴードンの陥った最底辺ということになる。みずから追い込んだ地

点であるとはいえ、この時点での葉蘭とディーセンシーへの彼の「勝利」の味は苦々しい。しかし没落した「中産階級の中」の出自と屈辱的な学校体験に由来するコンプレックスの表出としてのゴードンの観念的な反逆精神をまったく共有しない恋人 Rosemary が介入してくることによって、ゴードンは回心をとげることになる。象徴的にも、第10章で枯れてしまったと書かれた葉蘭は、じつはまだ生きていた。第11章冒頭、春が来て、その葉蘭は若葉を出しているのだ（“The aspidistra, it turned out, had not died after all; the withered leaves had dropped off it, but it was putting forth a couple of dull green shoots near its base” (249)）。ローズマリーの妊娠の知らせを受けて、ゴードンは結婚と広告会社への復帰を決意する。

物語中でゴードンはロンドンの町中をよく歩き、思索にふける。この点では次の小説 *Coming Up for Air* (1939) と共通する「街あるきもの」（小野 260）という特徴を有しているといえる。その「街あるき」の最後のくだりが、上記の「回心」の直後に出てくる。彼が歩いている見知らぬ通りは、みすぼらしい古い家屋が立ち並んでいる。ほとんどが貸間になっている。煙で黒ずんだ煉瓦。白く塗った階段。薄汚れたレースのカーテン。半分ほどの窓に「アパートメント」という札がかかり、ほぼすべてに葉蘭がある。「典型的な下層中産階級の通り」である。しかし——とゴードンの心中が語られる——「全体としては、爆弾で粉みじんに吹き飛ばされてしまったらよいと彼が思うような通りではなかった（But not, on the whole, the kind of street that he wanted to see blown to hell by bombs）」(267)。つづけて記述されるゴードンの想念は *Nineteen Eighty-Four* における洗濯をする prole の女性を見た主人公 Winston Smith のそれと重なるような、「オーウェル節」と呼んでもよいようなものである。

He wondered about the people in houses like those. They would be, for example, small clerks, shop-assistants, commercial travellers, insurance touts, tram conductors. Did they know that they were only puppets dancing when money pulled the strings? You bet they didn't.

And if they did, what would they care? They were too busy being born, being married, begetting, working, dying. It mightn't be a bad thing, if you could manage it, to feel yourself one of them, one of the ruck of men. Our civilization is founded on greed and fear, but in the lives of common men the greed and fear are mysteriously transmuted into something nobler. The lower-middle-class people in there, behind their lace curtains, with their children and their scraps of furniture and their aspidistras — they lived by the money-code, sure enough, and yet they contrived to keep their decency. The money-code as they interpreted it was not merely cynical and hoggish. They had their standards, their inviolable points of honour. They “kept themselves respectable” — kept the aspidistra flying. Besides, they were alive. They were bound up in the bundle of life. They begot children, which is what the saints and the soul-savers never by any chance do.

The aspidistra is the tree of life, he thought suddenly. (267-8)

現代文明の貪欲さと恐怖とをはるかに高貴なものに変容させてしまう庶民の不思議な力への讃美がここでなされている。ロウアー・ミドルの生活力への共感と、その生き方に連なろうとするゴードンの決意あるいは回心は、同時に詩人＝反逆者としての自己を断念することでもあった。彼は長く創作に打ち込んできた詩『ロンドンの歓び』の原稿を下水に投げすてる。折しも、近くの家窓には葉蘭が見える。「汝は勝てり、おお、葉蘭よ！(Vicisti, O Aspidistra!)」(269)と、ゴードンの葉蘭への「敗北」が語られる。詩人としての断念を伴うものであるとはいえ、前章の「勝利」の苦さと逆に、ここでは葉蘭をめぐる冒険の果てにディーセンシーという「いわば下からの自律的な道德律」(見市 30)をつかみとったゴードンの再生の喜びがある。「ディーセントな暮らし」の可能性を否定する「過激なベシニズム」(Meyers 90)を回避できた解放感がある。ローズマリーと結婚したゴードンは、当然のように、新居のアパートに葉蘭を置くことになる(276)。

IV. 「世界で一番大きな葉蘭」

OED の “*aspidistra*” の定義に “a symbol of dull middle-class respectability” とあるのはすでに見たとおりだが、このシンボリズムは、「冗談の種」としても、時代がかったものであって、いまとなってはノスタルジックに回顧されるものであるということは指摘しておくべきであろう。イギリスの家庭で愛でる観葉植物はいまでは多様化し、葉蘭へのかつての熱狂は過去の話となっているのである。じっさい、1984年に刊行された *An ABC of Nostalgia* という本は副題に “From Aspidistras to Zoot Suits” とあって、この時点で葉蘭が郷愁を誘う事物になっていたことを示唆している (Black)。

そうした葉蘭へのノスタルジアの一部をなすものとして、20世紀前半のイギリスを代表する人気歌手 Gracie Fields (1898–1979) のヒット曲 “The Biggest Aspidistra in the World” (1939) を欠かすことはできない。その一番の歌詞を以下に引いておく。⁶

For years we had an aspidistra in a flower pot
On the whatnot, near the hatstand in the hall.
It didn't seem to grow, till one day our Brother Joe
Had a notion that he'd make it strong and tall.
So he crossed it with an acorn from an oak tree,
And he planted it against the garden wall.
It shot up like a rocket till it nearly reached the sky.
It's the biggest aspidistra in the world.
We couldn't see the top of it; it got so blooming high.
It's the biggest aspidistra in the world.

葉蘭の鉢が元気がないので、オークの木の団栗と掛け合わせて庭に植えた結果、それは天に届くほどぐんぐん伸びて「世界で一番大きな葉蘭」になったというわけである。このあと、父親がパブで酔った勢いで葉蘭の上で「類人猿ターザン」ごっこをして遊び回ったり、盛りのついた猫がそこで騒ぐのを犬が喜んで見ていたり、老いてきた葉蘭にギネス・ビールをか

けて元気づけたりし、ついにはあまりに大きくなりすぎて飛行機が上空を飛ぶ邪魔になるというので、結局切り取って薪にしてしまうという落ちになる。芸の幅が広い 그레이シーの歌のなかで、これはコミック・ソングの部類に入る。その荒唐無稽な歌詞といい、リフレインの “It’s the biggest aspidistra in the world” の節回しといい(特有の北部訛りで、h の音も大抵抜かして歌われる)、この曲に先立つ “He’s dead but he won’t lie down” (1932) と共通するような味わいがある。そしてこの “He’s dead but he won’t lie down” といえば、オーウェルが 1939 年に発表した小説 *Coming Up for Air* で、エピグラフに用いた歌なのであった。⁷ “The Biggest Aspidistra” の場合は *Keep the Aspidistra Flying* の 3 年後に発表された歌であるから、小説の「先行テキスト」ではもちろんない。とはいえ、ゴードンが

最終的に受け容れる “aspidistral”⁸ なるものに象徴される、庶民のたくましい生命力とでもいったものが、この流行歌のなかにも歌い込まれているという点は強調しておきたい。

そのイメージを視覚的に確認するために、カートゥーンを一枚紹介しておく。日刊紙 *Daily Mail* の 1941 年 5 月 7 日号に掲載されたもので、作者は Neb こと Ronald Niebour。⁹ 第二次大戦中、ドイツ軍によるロンドン大空襲 (the blitz) がまだやまなかつた時期の



“Hardy things aren’t they?”
Daily Mail 7 May 1941.

一枚である。爆撃で破壊された家の瓦礫のなかで、葉蘭の鉢だけはびくともせずにいる。銃後 (home front) で緊急時の民間防衛活動 (civil defence) に当たっているヘルメットをかぶった男(あるいは家の住人であろうか)が仲間に向かって「なあ、丈夫だろう? (Hardy things aren't they?)」(キャプション)と語っている。あいかわらず「国民的な冗談」の種として葉蘭が使われてはいるものの、もはや「死ぬだけの精神をも持たない」嘲弄すべきものというよりは、戦時の非常事態を生き抜くたくましきものというポジティブなイメージへと昇華されている。葉蘭に託す「ディーセント」な暮らしを営む生命力に対する希望は、オーウェル一人のものでなかったことがわかる。彼がスペイン戦争を回顧したエッセイの末尾に記した “No bomb that ever burst / Shatters the crystal spirit” (13: 511) という名高い詩句をもじっていうならば、いかなる爆弾も砕くことはできない「水晶の精神」が葉蘭に具象化されるに至った——そのように見ることもできるかもしれない。

最後に、*Keep the Aspidistra Flying* というタイトルそのものについて指摘しておきたい点がある。このタイトルは1915年の流行歌 “Keep the Home Fires Burning” をおそらくもじっている、ということである。作詞が Lena Ford で作曲が Ivor Novello によるこの歌は、第一次世界大戦の勃発によって大陸に出征したイギリス人青年たちのために、彼らが帰国するときまで (“Till the Boys Come Home”) 残された者(妻、恋人)が暖炉の火を絶やさずに家を守っているようにせよ、という「銃後の守り」を説く歌詞をもち、そのセンチメンタルなメロディ(リフレインの出だしはまさにこの “Keep the Home Fires Burning” の句)と相まって、大戦中に大いに愛唱された。これを「もと歌」として、オーウェルは *Keep the Aspidistra Flying* というタイトルを付けたのだと推測できるのである。この点をだれかすでに指摘しているのかどうか、私は寡聞にして知らない。取るに足らないことだといわれればそれまでだが、流行歌に独特の思い入れをもっていたオーウェルのこと、口ずさめるタイトルをこの小説に採用したのは非常

に意義のあることだったと私には思える。ちなみにこの流行歌については、*Evening Standard* の 1946 年 1 月 19 日号にオーウェルが寄せた流行歌をめぐる随想 “Songs We Used to Sing” で言及している (18: 50)。この点、念のため附言しておきたい。

注

1 オーウェルからの引用は Peter Davison 編の全集版により、巻号とページで注記する。ただし、*Keep the Aspidistra Flying* のテキストは煩瑣になるので巻号 (4) を省略し、ページのみを記す。ちなみに現行の Penguin 版のテキストはこの全集版と同一であり、ページ数もまったく変わらない。

2 本文中で “aspidistra” の語は単数形、複数形を併せて都合 64 度出てくる。

3 1943 年 12 月 2 日に放送された BBC のラジオ番組 “Your Questions Answered” のなかで、「ウィガン波止場はどれくらいの長さで、それはどういうものですか」という質問に対してオーウェルはこう答えた。“Wigan has always been picked on as a symbol of the ugliness of the industrial areas. At one time, on one of the little muddy canals that run round the town, there used to be a tumble-down wooden jetty; and by way of a joke someone nicknamed this Wigan Pier. The joke caught on locally, and then the music-hall comedians get [sic] hold of it, and they are the ones who have succeeded in keeping Wigan Pier alive as a by-word, long after the place itself had been demolished” (16: 11).

4 ここに挙げられた当時の大衆作家について注記しておく、Michael Arlen (1895–1956) の *The Green Hat* (1924) は Greta Garbo 主演で映画化された。Edgar Rice Burroughs (1875–1950) は *Tarzan of the Apes* (1914) 等のターザン物で人気を博した。George Warwick Deeping (1877–1950) は映画化された *Sorrel and Son* (1925) 他 60 編の小説を書いた。Ethel Mary Dell (1881–1939) は *The Way of an Eagle* (1912) ほか、ハードボイルド物を多く書いた。Gilbert Frankau (1884–1952) は *Peter Jackson* (1919) ほか。Gibbs は Sir Philip Hamilton Gibbs (1877–1962)、あるいはその弟の Arthur Hamilton Gibbs (1888–1964)。前者の代表作は *The Street of Adventure* (1909) 後者は *Soundings* (1925) など。“Sapper” は H. C. McNeile (1888–1937) の筆名。*Bulldog Drummond* (1920) などの活劇風小説を発表。“middle-middle class” の Mrs Penn が言及する John Galsworthy (1867–1933)、J. B. Priestley (1894–1984)、H. S. Walpole (1884–1941) は、Dell らと比べると確かに「高級」だとはいえるが、Q. D. Leavis はこれらの作家たちについても「偽の感受性や周囲の生活に対する鈍感さ」(76) を示すような小説の書き手として批判的に検証している。

5 『一九八四年』における文化戦略としての「大衆文化」の領有という主題については、川端(48 頁以下)を参照。

6 “The Biggest Aspidistra in the World” の作詞・作曲は Will E. Haines,

Jimmy Harper and Tommy Connor による。Gracie Fields によるこの歌の吹き込みは数ヴァージョンある(第二次大戦中にはヒトラーを茶化した歌詞のものもある)。ここでは 1939 年のオリジナル・レコードを音源とした CD (*Gracie Fields*. Empress, 1994. RAJCD 833) からトランスクリプトした。

7 これについては拙稿「郷愁と抵抗——『空気をもとめて』のために」で論じた(川端 190 以下)。

8 “aspidistral” という形容詞はこの小説で 3 回使われる。“He was a made man — or, by Smilesian, aspidistral standards, *unmade*” (60); “Why chew leathery beef in the aspidistral dining-room when he had ten quid in pocket — five quid, rather?” (171); “Flaxman’s wife had forgiven him, and he was back at Peckham, in aspidistral bliss” (233). これはおそらくオーウエルの造語である。*OED* はこれを “of or pertaining to an aspidistra; abounding in aspidistras” と定義し、この小説での用例を初出例として挙げている。ついでながら、イギリス BBC の設立 50 周年を祝して Peter Black が出した本はこの歌のタイトルを書名に採っている。そのジャケットの裏にはこう記されている。“The aspidistra is a useful and decorative plant that thrives in parlours, sitting-rooms and the like; it prospers in temperate conditions and reproduces itself by division.” ラジオおよびテレビというマス・メディアの繁栄を葉蘭の繁殖力になぞらえての命名であることが見て取れる。

9 Ronald Niebour は 1930 年代から 1960 年まで *Daily Mail* を主要な活躍の舞台とした。第二次大戦後、ヒトラーの官邸から彼と L. G. Illingworth のカートゥーンのファイルが発見されたというエピソードがある (Bryant and Heneage 161)。

引用文献

Black, Peter. *The Biggest Aspidistra in the World: A Personal Celebration of Fifty Years of the BBC*. London: BBC, 1972.

Byant, Mark, and Simon Heneage. *Dictionary of British Cartoonists and Caricaturists 1730–1980*. Aldershot, Hants: Scolar Press, 1994.

Fenwick, Gillian. *George Orwell: A Bibliography*. Winchester: St Paul’s Bibliographies, 1998.

Hughes, M. V. *About England*. London & Toronto; J. M. Dent & Sons, 1927.

川端康雄『オーウエルのマザー・グース——歌の力、語りの力』平凡社、1998 年。

小池滋「小説家オーウエル」『オーウエル著作集 III』平凡社、1970 年。

Leavis, Q. D. *Fiction and the Reading Public*. London: Chatto & Windus, 1932; with a new introduction by John Sutherland. London: Pimlico, 2000.

Loewer, Peter. “The Wild Gardener: The Blooming Aspidistra.” 2 Nov. 2005 <<http://www.mountainx.com/garden/2002/0522wild.php>>.

Meyers, Jeffrey, ed. *George Orwell: The Critical Heritage*. London and Boston: Routledge & Kegan Paul, 1975.

見市雅俊「ジョージ・オーウエルと 30 年代の神話」『思想』650 号 (1978 年 8 月)、

28-44。

中島文雄 『英語の常識』 研究社、1953年。

小野二郎 「オーウェルの『街あるきもの』——『どん亀人生』書評」『小野二郎セレクション——イギリス民衆文化のイコノロジー』川端康雄編、平凡社、2002年。

Orwell, George. *The Complete Works of George Orwell*. Ed. Peter Davison. 20 vols. London, Secker & Warburg, 1986-1998.

———. *Keep the Aspidistra Flying*. Harmondsworth: Penguin, 1989.

Turner, E. S. *An ABC of Nostalgia: From Aspidistras to Zoot Suits*. London: Michael Joseph, 1984.